

外科医のためのエビデンス

安達洋祐(著)

大阪大大学院教授・消化器外科学

森 正樹

偏見・常識に囚われない公平な文献の解析

医学書院から刊行されている『臨床外科』誌に、安達洋祐先生による「臨床の疑問に答える—ドクター A のミニレクチャー」が連載されていた。2012 年から 2015 年のことである。すこぶる評判が良いためこの連載を本にしてほしいと思っていたが、それが現実となった。『外科医のためのエビデンス』として書籍化されたのである。しかし、本書は単にこれまでのミニレクチャーをまとめただけではない。短期間のうちに最新の文献が加えられ、また大幅に加筆された。

本書は以下の 6 章から構成されている。

I. 外科診療, II. 手術患者, III. 術後管理, IV. がん手術, V. がん診断, VI. がん患者。

それぞれの章には本編 5 つと番外編 1 つが含まれている。たとえば第 II 章の手術患者の本編 5 つは、

1. 喫煙患者の手術—禁煙で術後合併症は減るか
2. 大腸手術の前処置—術前の腸管洗浄は必要か
3. 閉塞性黄疸の患者—術前の減黄処置は必要か
4. 閉塞性大腸がん—腸閉塞にステントは有用か
5. 予防的ドレーン—手術でドレーンは必要かとなっている。

番外編の 1 つは、「治療成績の性差—男と女で経過がちがうか」というタイトルである。どれも大変重要であるもののあいまいに済ませがちなテーマである。しかし、著者はあいまいに済ませない。

本編も番外編も本文は同じ構成になっており統一感を持って読むことができる。本文は 6 つに分けられている。その項目は①素朴な疑問、②基本事項、③医学的根拠、④補足事項、⑤筆者の意

見、⑥疑問の解決となっている。本文の後は文献が並べられているが、もっとも文献数が少ないのが「III. 術後管理」の番外編「スポーツ観戦—サッカーは心臓にわるいか」であり、16 編が引用されている。しかし、そのようなテーマで世界の一流誌に 16 編も論文が掲載されていたことに驚く。世界中でサッカーが如何に生活に密着しているかがわかる。逆に最も文献数が多いテーマは「IV. がん手術」の「5. がんの腹腔鏡手術—低侵襲手術は予後がよいか」であり、50 編が引用されている。重要度の高い論文を漏らさず記載する能力は長年培ってきた著者独自のものであろう。

さて、本編では以上の 6 つの項目のほかに、目を引くところがある。それは各編の初めと終わりの工夫である。各編ともテーマの次に 4 行の示唆に富む文章が市販の新書から引用されている。その内容は時には形而上的、時には形而下的である。これが本文の絶妙な導入役を果たしている。辻秀男先生や柏木哲夫先生など医師に馴染のある先生の文、村松秀先生や近藤誠先生など話題の先生の文などが巧みに、そして偏見なく引用されている。他方、各編の最後には 3 つのポイントとイグ・ノーベル賞の 2 つのコラムが掲載されている。3 つのポイントとは、著者が医師として実践していること、あるいは自戒していることを 3 つにまとめたものである。例えば、「執筆を依頼されたとき」は、「引き受ける、字数を守る、早めに送る」である(なるほど!)。また、「医師のわ



●B5/頁232/2015 年
定価：本体 4,000 円＋税
[ISBN978-4-260-02100-5]
医学書院 刊

るいクセ」は、「字がきたない，時間を守らない，他人にきびしい」である(なるほど!). 最後にイグ・ノーベル賞を紹介するコラムを設けているが，実に面白い. 1993 年の文学賞は「著者の数が論文のページ数の 100 倍もある医学論文」に，2006 年の鳥類学賞は「キツツキはなぜ頭痛を起こさないかを解明」に，また 2014 年の生物学賞は「イヌが排尿・排便するときはからだを地

磁気の南北軸に一致させることを観察して記録」に対して贈られている. いずれも殊更に奥深い研究成果である. 常識に囚われないことの大切さを示すために設けたコラムであろう.

安達先生の著書は偏見に囚われないこと，文献を公平に解析して客観的にまとめることから医療関係者から絶大な信頼を得ている. 本書もその姿勢にのっとった素晴らしい本である.